

地球規模保健課題解決推進のための研究事業（日米医学協力計画）
「日米医学協力計画の若手・女性育成のための日米共同研究公募」
事後評価 課題評価委員会における主な指摘事項

研究開発課題名	HIV 潜伏感染細胞に含まれる新たな自然免疫型 T 細胞の同定 / Identification of innate-like T cell as a novel HIV reservoir
研究開発機関	熊本大学 ヒトレトロウイルス学共同研究センター
研究開発代表者	本園 千尋
研究期間	令和 2 年 9 月 15 日から令和 4 年 3 月 31 日

○評価委員会コメント

強み：

- 抗原提示分子に依存的な自然免疫型 T 細胞の増殖を検出する実験系の樹立に成功するなど、仮説の証明に向けて必要な実験系を樹立できており、仮説が正しく適切な臨床検体にあたれば、仮説の証明ができる。
- 「通常型の T 細胞だけでなく、非ペプチド性抗原に応答する自然免疫型 T 細胞が HIV 感染細胞として HIV のリザーバーになっている」の仮説を支持するデータとして、HIV-1 感染細胞の中には非ペプチド抗原に応答する CD4 陽性自然免疫型 T 細胞サブセットが含まれていることを示した。
- In vitro ではあるが、HIV が自然免疫型 CD4 T 細胞に感染する可能性を明らかにしたことは評価できる。
- 着実な研究成果を得ており、自然免疫型 T 細胞の研究は興味深く、今後の進展が期待される。

弱み：

- 当初研究の仮説として設定した、自然免疫型 CD4 T 細胞と HIV 感染症での慢性炎症への関与に関しては、全く解析が行われていない。細胞数が少ないことなど研究の困難は理解できるが、今後の展開の可能性や具体策も示されていない。
- 非ペプチド抗原に応答する CD4 陽性自然免疫型 T 細胞サブセットの多い検体を選別できないと、リザーバーとしての意義を明らかにできない可能性がある。
- 未だ主結論にいたる十分な evidence は得られておらず、潜伏機序における重要性は不明である。